

現代民俗学会 第27回運営委員会議事録

日 時：2014年7月26日(土)10:00～11:30

場 所：東京大学

出席者：

(運営委員) 川田、菅、塚原、徳丸、俵木、古家、宮内 (13人中7人出席、3人委任状)
(事務局) 武井

1. 総務委員会 (塚原委員)

(1)すでに委嘱されている今期各委員会のメンバー

これまでに委嘱されている各委員会のメンバーは以下の通りである。

【研究企画委員会】

伊藤純、梅屋潔、金子祥之、※川田牧人、島村恭則、菅豊、鈴木洋平、塚原伸治、俵木悟、松岡薫、宮内貴久

【編集委員会】

及川祥平、川森博司、鈴木寛之、※徳丸亞木、野口憲一、渡部圭一

【総務委員会】

飯倉義之、櫻井知得、武井基晃、※塚原伸治、藤野哲寛、古家信平

メンバーについては、運営委員会の審議を経ることで随時追加が可能であることが、確認された。

(2)3年以上未納者の会員身分について

3名の会員について、(1)昨夏と今春に2度にわたって期限を過ぎたため、これまでと同様に退会処分にする予定である旨、(2)該当者から今後、会員身分の復帰を求められた場合、2011～2013年の3年分の納付を求める旨、報告された。

(3)会誌の電子公開について

昨年度から引き続き進めている会誌の電子公開について、以下の通り報告された。

J-STAGE (科学技術情報発信・流通総合システム) への登録にむけて現在調整中であり、7月24日に科学技術振興機構 (JST) において塚原が解説を受けた。編集委員会と連携しつつ、進める予定である。

国立情報学研究所のNii-ELS (CiNii) が事業を縮小し、電子ジャーナルのサービスを終了したため、登録手続きは白紙に戻った状態であり、テクニカルなレベルでいくつか問題があるが、積極的に進めていくことが報告された。

2. 編集委員会（徳丸委員）

2-1. 報告

以下の点につき報告された。

(1)第6号の和文要旨

第6号の論文・研究ノート掲載者に対し、web掲載用の和文要旨の提出を依頼し、とりまとめを完了した。

(2)第7号のエントリー状況

2014年5月31日（土）の期限までに8本のエントリーがあった。

(3)投稿状況

7月1日（土）の期限までに5本の投稿があり、書式チェックのうえで受理した。

(4)審査状況

現在、内部査読者の選定を終え、外部査読者の人選と内諾の段階に至っている。

(5)今後のスケジュール

スケジュールは以下の通りである。

査読者の選定・査読依頼（7月下旬）→査読到着（8月下旬）→評価の決定と改稿指示（9月中旬）→再投稿受理・再査読依頼（10月中旬）→再査読到着（11月上旬）→改稿指示（11月中旬）→再々投稿受理（12月上旬）→最終審議・採否通知（12月中旬）

→書式統一・入稿（12月中旬～1月上旬）→校正・納品（3月末日）

なお印刷所は、6号までの実績に鑑み、従来通り株式会社イセブ（茨城県つくば市天久保2-11-20）とする予定である。

(6)依頼原稿の状況

今号では特集として以下の特集企画を巻頭に掲載する。

- ・特集テーマ：妖怪研究の最前線（仮題）

- ・進捗状況：現在までに2名の執筆者の内諾を得ている。また、追加の執筆者について検討中である。

- ・その他の依頼原稿：一般投稿の審査状況に応じ、ひきつづき特別寄稿論文・批評・コメントの依頼を積極的に検討する。

各委員からは、一般投稿原稿が少ないという現状に鑑み、毎号特集を組むことを検討すること、研究会企画との連動を積極的に検討することなど、会誌の将来設計に関する意見が出された。また、研究企画委員会で積極的に進めている「次世代ユニット企画」との関連で、若手による特集企画などについても検討することなどが提案された。

2-2. 審議

(1)新規委員の委嘱

上形智香氏（筑波大学）、黒河内貴光（筑波大学）、松岡薫（筑波大学）の3名を編集委員として委嘱することが提案され、承認された。

(2)メーリングリストの動作不安定について

査読委員会メーリングリストあてに投稿されたメールが配信されないケースが数件生じていることがあるという報告があり、他の委員会の状況について情報交換がなされたが、現状では査読委員会メーリングリストのみに生じているという状況であることがわかった。次回同様のケースが生じた場合には、サーバー側に問い合わせ、対応を仰ぎたい。

3. 研究企画委員会（川田委員）

(1)次回研究会について

9月28日開催の「民俗学の論点2014」について、現状、15本の企画が上がっており、それぞれについて担当者に割り振りプレゼンテーションを実施することが報告された。また、第二部の「次世代ユニット」についても、若手メンバーを中心に調整中であることが報告された。

各委員より整理後のものを担当者に割り振るのではなく、各自がそれぞれ自由に発表する形式がよいのではないかという意見が述べられた。また、「次世代ユニット」という呼称に対する違和感や、グループを作ることでセクショナリズムに陥り、若手委員が「次世代企画」専属であるかのような印象を与えてしまう危険性などが述べられた。「次世代ユニット」というのはあくまでも通称で、それぞれのメンバーは正規の研究企画委員として研究企画委員会の活動全体に参画するということが改めて確認された。

4. その他

今後の運営委員会は、メーリングリストを積極的に活用して迅速な審議を進めていくこと、対面の運営委員会についても、必要があれば適宜開催することが確認された。